

発信！ 特別支援教育

特別支援学級の授業づくり —自立と社会参加を目指して—

特別支援学級は、障がいのある児童生徒の自立と社会参加を目指し、毎日の実践の中で主体的な取り組みができるよう支援していきます。そのために、子供一人一人のよさやできることが発揮できる授業づくりをしていくことが大切です。今回は、知的障がいのある児童生徒の授業づくりについて、教育センターで実施した「特別支援教育における授業力アップ講座【前期】」で講師の植草学園短期大学 佐藤慎二教授に教えていただいたことの中から、何点かお伝えしたいと思います。

1 知的障がいの障がい特性とは

知的障がいがある場合、手続きや順番、操作といった動きを伴った方が記憶しやすいという特性があります（手続き的・操作的記憶）。そのため、実際の・具体的に体験していく方が学びやすく身に付きやすいといえます。特別支援学校学習指導要領解説には以下のように示してあります。

知的障害のある児童生徒の学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことなどが挙げられる。また、実際的な生活経験が不足しがちであることから、**実際の・具体的な内容の指導が必要であり、抽象的な内容の指導よりも効果的である。**

（特別支援学校学習指導要領解説）

2 知的障がい教育独自の教育目標を受け止めて

特別支援学校学習指導要領には、通常の学級の教科とは別に、知的障がい教育の教科が示されており、教科の目標も内容も指導の方法も異なります。抽象思考が苦手なため、実際の・具体的な活動を重視し、「教科別の指導」をする場合であっても、生活に結びつき、生活に生かせる内容にすることが大切です。また、各教科や道徳、特別活動及び自立活動をばらばらに指導するよりも、合わせて生活の中で具体的に学習していく「各教科等を合わせた指導」が効果的であることも特別支援学校学習指導要領解説の中には示されています。

3 「力をつける」教育から「力を使いたくなる」教育へ

自分から進んで取り組んだときに、子供たちは力を身につけていきます。学習したことが日常生活と互換性があり即使える、実際の生活との行き来がある、そんな「力を繰り返し使いたくなる活動」を設定していくことが大切です。繰り返し使う中で、力を高めていくことができるのです。「やりたいから、やりがいがあるから、自分からやる」を目指して、今ある力を精いっぱい発揮できる活動を展開していきましょう。

4 力を繰り返し使いたくなる活動＝生活単元学習・作業学習を中心にした教育課程

義務教育の終了を見据えて、生活する力・働く力をどう育てるのか。そのためには、学習活動が実際の生活と結びつくように、生活単元学習や作業学習を意図的に組織していくことが大切です。生活と結びついた実際的なことに徹底して取り組むことで、繰り返しやってみようとする主体性と実生活に役立つ力、将来働くことに結びついていく力を育てていくことができます。

5 教科別の指導の要件

毎日の授業の中で、なぜこの学習に取り組むのか、学ぶ必然性を子供自身が理解できているでしょうか。学ぶ必然性のあるリアルな（実生活に即した）課題であれば、子供は自分から学んでいきます。使わない力は忘れてしまいます。学んだことや身につけた力を使える活動や生活場面が用意されていることが、確かな力にしていくために大切なことです。

